入れ札

原作　菊池寛『入れ札』（小説版・戯曲版）
映像用脚色・Ｃｌａｕｄｅ稿
台本ノート紹介用サンプル

登場人物
国定忠次　逃亡中の一家の親分。
稲荷の九郎助　一家でいちばん古い子分。五十に近い。
弥助　九郎助に次ぐ古顔。四十前後。
大間々の浅太郎　忠次の信任が厚い子分。
松井田の喜蔵　分別盛りの四十男。矢立を持っている。
嘉助　一行で第一の大力。
釈迦の十蔵　二十二、三。盃をもらって二年に足りない。
闇雲の忍松　半白の頭の老いた子分。
並川の才助　昔、九郎助の世話になった。今は浅太郎を慕う。
吉井の伝助　字が書けない。
ほか子分二人。

1　上州・裏山の斜面（夜明け）

晩春。山の下、街道に沿った村々に青い桑畑が続き、朝靄がかかっている。

道のない斜面を、十二人の男が登って来る。

先頭は忠次。関東縞の袷に鮫鞘の長脇差、脚絆に草鞋。一人だけ菅笠をかぶっている。小鬢に傷痕がある。

すぐ後ろに浅太郎。喜蔵、嘉助が続く。

片袖のちぎれかけた者、脚絆が片方ない者、白っぽい縞の着物に血をにじませた者。

列の後ろに九郎助と弥助が並んでいる。

弥　助「もうじき信州か。お前が親分と二人で、賭場から賭場を渡って歩いたのは、あっちの方だったな」

九郎助「十年も前の話だ」

九郎助は列の先を見る。忠次の菅笠のすぐ後ろに、浅

太郎の背中がある。

2　同・山腹（朝）

雑木の茂った小高い山の中腹。足もとは熊笹。

忠次が振り返る。山と山の間に、赤城山がほのかに浮かんでいる。

忠　次「赤城山も見納めだな。おい、ここいらで一服しようか」

忠次は大きな切り株に腰を下ろし、赤城山を見ている。

子分たちは草の上にうずくまり、寝ころぶ。

九郎助と弥助が腰を下ろす。隣に浅太郎。才助が浅太郎のそばへ来て座る。

弥　助「あの時分の稲荷の兄いは、豪勢なもんだった。親分だって、ばくち打ちの式作法は、お前に教わったようなものだ」

浅太郎「式作法は教わったかも知れねえが、あの度胸骨と腕っ節は、まさか教わりゃしねえだろう」

九郎助「何だと」

浅太郎「昔は昔さ。昔は親分と兄弟同様だったか知らねえが、今じゃ盃をもらって子分になってりゃ、俺たちとは朋輩だ。あんまり昔のことを振り回しなさんなよ、兄い」

九郎助、才助を見る。才助は目をそらし、浅太郎の方へ向き直る。

九郎助、黙る。

忠　次「おい、みんな」

叱りつけるような声。寝ころんでいた者が起き直る。

眠りかけていた者も目をあける。

忠　次「ちょっと耳を貸してもらいてえ。俺はこれから、信州へ一人で落ちて行こうと思うのだ。お前たちを連れて行きてえのは山々だが、お役人を叩っ斬って、天下のお関所を破った俺たちが、お天道様の下を、十人二十人つながって歩くことは許されねえ。二、三人は一緒に行って

もらいてえとも思うのだが、今日が日まで同じ辛苦をしたお前たちの中から、汝は行け、汝は来るなという区別は付けたくねえのだ。連れて行くからなら、一人残らず連れて行きてえ。別れるからなら、恨みっこのねえように、みんな一様に別れてしまいてえ」

忠次、胴巻から五十両包みを三つ取り出し、熊笹の上に投げ出す。

忠　次「使い残りの金が百五十両ばかりあらあ。みんなに十二両ずつくれてやって、残ったのは俺がもらって行く。めいめい志を立てて落ちてくれ。忠次がどこかで捕まって、江戸送りにでもなったと聞いたら、線香の一本でも上げてくれ」

誰も金包みに手を出さない。

浅太郎「そりゃ親分、悪い了簡だろうぜ。俺たちが妻子眷族を見捨てて、ここまでお前さんについて来たのは、何のためだと思うのだ。お前さんの落ち着くところを見届けたい一心からじゃねえか。物騒な野郎ばかりがつながって歩

けねえのは道理なのだから、お前さんが、こいつだと思う野郎を名指しておくんなせえ。恨みつらみを言うような、けちな野郎は一人だってありゃしねえ。なあ、兄弟」

子分たち「そうだとも」

忠次の目が、浅太郎、喜蔵、嘉助の顔に順に止まる。口を開きかけて、閉じる。

血のにじんだ着物の者、片袖の者が、忠次を見ている。九郎助も見ている。

忠次は金包みに目を落とし、黙っている。

十　蔵「ああ、いいことがあらあ。籤引きがいいや。みんなで籤を引いて、当たった者が親分のお供をするのがいいや」

嘉　助「何を言ってやがるんだい。手前のような青二才に籤が当たってみろ、かえって親分の足手まといじゃねえか。こんな時に一番物を言うのは腕っ節だ。おい親分、くだらねえ遠慮なんかしねえで、一言、嘉助ついて来いと言っておくんなせい」

喜　蔵「嘉助の野郎、何を大きなことを言ってやがるんだい。腕っ節ばかりで世間は渡られねえぞ。知らねえ土地を渡り歩いて、上州の国定忠次でございと言って歩くには、駆け引き万端の軍師がついていねえことには、どうにもならねえのだ。手前がいくら大力だからといって、ドジばかり踏んでいちゃ、旅先で飯にはならねえぞ」

忍　松「親分、俺あお供はできねえかねえ。俺あ腕っ節は強くはねえ。喜蔵のように軍師でもねえ。が、お前さんのためには、一命を捨ててもいいと、とっくに覚悟を決めているんだ」

子分たち「何を言ってやがるんだい」「親分のために命を投げ出している者は、手前一人じゃねえぞ」

忍松、半白の頭をかいて黙る。

九郎助は忍松を見ている。その目を自分の膝に落とす。

朝日が高くなっている。

忠　次「お前たちのように、そうザワザワ騒いでいちゃ、いつが

来たって果てしがありゃしねえ。俺一人を手離すのが不安心だというのなら、お前たちの間で入れ札をしてみちゃ、どうだい。札数の多い者から三人だけ連れて行こうじゃねえか。こりゃ一番、恨みっこがなくっていいだろうぜ」

喜　蔵「そいつあ思い付きだ」

浅太郎「そいつあ趣向だ」

子分たちがうなずく。十蔵も少し遅れてうなずく。

九郎助は動かない。

忠　次「いいか。ばくちは打っても、卑怯なことはするな。男らしくねえことはするな。いつも言っている通りだ」

忠次、切り株から立つ。

忠　次「喉が渇いた。この辺に水はねえか」

才　助「半町ばかり下に流れがありましたぜ」

忠　次「そうか。じゃ、行って飲んで来よう。その間に、誰を入れるか思案をしておけ」

浅太郎「俺も顔を一つ洗いてえや」

忠次に続いて、子分たちがどやどやと下りて行く。
九郎助は座ったまま動かない。立ちかけた弥助が、九郎助を見て座り直す。
二人だけが残る。
九郎助「ああ、嫌だ、嫌だ。どう考えても、俺は入れ札は嫌だな」
弥　助「なぜだい、兄い」
九郎助「入れ札じゃ、俺は三人の中へ入れねえ」
弥　助「そんなに自分を見限るにも当たらねえじゃねえか。忠次の一の子分といえば、お前に決まっているじゃねえか」
九郎助「上辺はそうなっている。だが俺は、去年、大前田との出入りの時、喧嘩場から引っ担がれてから、ひどく人望をなくしてしまった。上辺は兄い兄いと立てていてくれても、心の底じゃ俺を軽んじているんだ。入れ札になんかなってみろ。それが、ありありと札数に出るんだ」
弥　助「並川の才助がいるじゃねえか。あの男は、お前によっぽど世話になっているだろう」

九郎助「六、七年も前のことだ。今じゃ浅兄い浅兄いと、浅にばかりくっついていやがる」

　九郎助、指を折る。

九郎助「俺はこう思うんだ。浅には四枚入らあ。喜蔵には三枚だ。すると後に四枚残る。その四枚の中で、俺は二枚取りてえのだ」

　九郎助、弥助の顔をじっと見る。

九郎助「お前は俺に入れてくれるとして」

弥　助「心配することはいらねえや。お前が落っこちる心配はねえ」

　弥助は笑って、流れの方へ目をやる。

九郎助「あとの一枚だ。俺はその一枚を取るためには、片腕でも捨ててえ」

弥　助「冗談言っちゃいけねえ」

九郎助「何ぞといえば俺を目下に扱いやがる、あの浅への意地にだって、俺は捨てて行かれたくねえや」

　下から人声が近づく。

九郎助「あと一枚だ」

九郎助、腕を組む。

水を飲みに行った者たちが戻って来る。忠次は切り株に腰を下ろす。浅太郎は九郎助の隣に座る。

浅太郎「さあ、入れ札を早くやってもらおうか」

忠次が懐から鼻紙の半紙を出す。喜蔵が受け取り、長脇差を抜いて小さく切り分ける。

紙片が十一枚。喜蔵が一片ずつ配る。

喜蔵、腰の矢立を抜き、空の割籠の蓋を皆の真ん中に置く。

喜　蔵「矢立の筆は一本しかねえぞ。なるべく早く書いて回してくれ。書いた札は、この蓋の中へ入れてくれ」

忠　次「札の多い者から三人だぜ」

筆が次から次へ回る。体をひねって書く者、紙を手で囲う者。

丸めた札が、蓋の中にたまっていく。

弥助が書く。九郎助の所から手もとは見えない。弥助

は札を丸めて蓋に入れる。

弥　助「おい、兄い。筆をやらあ」

弥助は九郎助の肩をつつき、筆を渡す。九郎助の顔を見て、にやりと笑う。

九郎助の顔がゆるむ。筆を取る。

九郎助、蓋の中の札を見る。才助を見る。才助は浅太郎の向こうで、浅太郎と肩を寄せている。

九郎助は筆を持ったまま、白い紙片を見ている。

浅太郎「おい、兄い。早く回してくんな」

隣から、目下を叱るような口調。

九郎助、浅太郎をにらむ。

筆を持つ手が震える。九郎助は背を丸め、紙を体で覆い隠す。

仮名で書く。

〈くろすけ〉

くるくると丸め、割籠の蓋の中へ入れる。

手を引いた九郎助は、うつむく。顔を上げずに、筆を

浅太郎の方へ突き出す。
伝助が才助に耳打ちする。才助が伝助の紙に書いてやる。
最後の札が蓋に入る。
忠　次「喜蔵、お前、読み上げてみねえ」
子分たちは壺皿を見つめるような目つきで、喜蔵の手もとをにらむ。
喜蔵が札を一つ開く。
喜　蔵「あさ。ああ、浅太郎のことだな。浅太郎、一枚」
喜蔵は札を別に置き、次を開く。
喜　蔵「浅太郎、二枚」
忠次の浅黒い顔に、にっと微笑が浮かぶ。
喜　蔵「喜蔵が一枚。嘘じゃねえぞ」
喜蔵はにこりと笑い、札を右手で高く上げて見せる。
喜　蔵「その次が、また喜蔵だ」
喜蔵、また札を高く上げる。次を開く。
喜　蔵「嘉助が一枚」

忠次、小さくうなずく。
喜蔵、次の札を開いて首をかしげる。
喜　蔵「何だ、こりゃ。まるで金くぎだ。く、ろ、す、け。九郎助だな。九郎助が一枚」
九郎助の顔に血がのぼる。膝の上の手が着物をつかむ。喜蔵の手の中の札から、目を離せない。
喜蔵はその札を脇へ置き、もう次を開いている。
喜　蔵「浅が三枚だ。その次は、喜蔵が三枚だ」
札の山が二つ、高くなる。
喜　蔵「浅が四枚。喜蔵も四枚」
蓋の中に、丸めた札が一つ残る。
喜　蔵「これで浅と俺が四枚ずつ、嘉助と九郎助が一枚ずつだ」
嘉　助「あと一枚だな。俺と出るか、九郎助と出るか」
九郎助、弥助を見る。
弥助は蓋の中の札を見ている。九郎助の方を向かない。
喜蔵が最後の札を開く。

喜　蔵「嘉助だ」

九郎助、目を閉じる。

嘉助が膝を打つ。

喜　蔵「さあ、みんな聞いてくれ。浅と喜蔵とが四枚だ。嘉助が二枚だ。九郎助が一枚だ。疑わしいと思う奴は、自分で調べてみるといいや」

喜蔵、開いた札を束ねて一座へ差し出す。

九郎助の肩がこわばる。

誰も手を出さない。喜蔵が札を熊笹の上に置く。

九郎助、息をつく。

忠次が切り株から立ち上がる。

忠　次「じゃ、みんな腑に落ちたんだな。それじゃ、浅と喜蔵と嘉助とを連れて行こう。九郎助は一枚入っているから連れて行きたいが、最初言った言葉を変改することはできねえから、勘弁しな。さあ、先刻からえろう手間を取った。みんな金を分けて、めいめい志すところへ行ってくれ」

喜蔵が五十両包みを崩す。子分たちが十二両ずつ取る。

喜　蔵「九郎助兄い、何を考えているのだ。お前も手を出しなせえ」

九郎助、うつむいたまま手を出す。

忠　次「じゃ、俺たちは一足先に行くぜ」

忠次は三人を手で招き、頂上の方へ登りかける。

子分たち「親分、御機嫌よう」「御機嫌よう」

才　助「浅兄い、頼んだぜ」

浅太郎「安心していろよ」

忠次が振り向き、菅笠を取って振る。

長身が小松林の中に見え隠れし、やがて見えなくなる。

九郎助は目礼したまま動かない。

残った子分たちの顔に、失望の色がある。

忍　松「浅たちが付いていりゃ、大した間違いはありゃしねえ」

才　助「親分の胸の中だって、あの三人をめざしていたに違えね

えや」

十　蔵「違えねえ。あいつらを付けておけば大丈夫だ」

九郎助、顔を上げて才助と十蔵を見る。すぐに目を伏せる。

忍　松「さあ、俺は草津の方へ落ちてやらあ」

才　助「おいらも草津だ」

忍松、才助、十蔵、伝助、もう一人が、連れ立って下りて行く。

九郎助、弥助、子分が一人、残っている。

朝の微風。開いた札が熊笹を離れ、ひらひらと飛びそうになる。

九郎助「ああ、こんなものが残っていると、とんだ手がかりにならねえとも限らねえ」

九郎助は立ち上がり、散らばった札を拾い集める。

手の中に、〈くろすけ〉の札がある。

九郎助は札を重ねて、めちゃめちゃに引き裂き、投げ捨てる。顔は凄いほどに蒼い。

九郎助「俺は、秩父の方へ落ちようかな」

独り言のように言い、草津へ下りた者たちとは反対の斜面を下り始める。

弥助は草津の方を見る。九郎助の背中を見る。

3　同・榛名へ下る山道（午前）

九郎助が一人、ぐんぐん下って行く。

弥助の声「おい、兄い。稲荷の兄い」

九郎助、立ち止まって振り返る。弥助が息を切らして追いかけて来る。

九郎助は弥助の顔を見ると、前を向いて歩き出す。

弥　助「俺は、よっぽど草津から越後へ出ようと思ったが、よく考えてみると、熊谷在に伯父がいるのだ。熊谷は少しは危ねえかも知れねえが、故郷へ帰る足だまりには持って来いだ。それで俺も武州の方へ出るから、途中まで付き

合ってくれねえか」

九郎助は返事をしない。すたすた歩く。

弥助は九郎助の右に並び、顔をのぞく。そばへ寄る。

弥　助「俺あ、今日の入れ札は、最初から嫌だった。親分も親分だ。餓鬼の時から一緒に育ったお前を、連れて行くと言わねえ法はねえ。浅や喜蔵は、いくら腕っ節や才覚があっても、お前に比べれば、ほんの小僧っ子だ。たとい入れ札にするにしたところが、野郎たちがお前を入れねえということはありゃしねえ」

九郎助、前を向いたまま歩く。

弥　助「十一人の中で、お前の名を書いたのは、この弥助一人だと思うと、俺あ、あいつらの心根がまったく分からねえや」

九郎助の左手が、脇差の柄をぐっと握りしめる。

弥助のいる右側からは、その手は見えない。

九郎助、歩きながら弥助をにらむ。

弥助は平気な顔で前を見て、寄り添って歩いている。

弥　助「お前の名が一枚出たろう。あれが俺の札よ。俺よりほかに誰が書くと思う」

九郎助の口が開く。

声が出ない。口を閉じる。

弥　助「まさか、手前の名を手前で書くような、けちな野郎もあるめえし」

弥助、自分の言ったことに笑う。

柄を握った九郎助の指がゆるむ。手が柄を離れ、下がる。

九郎助は弥助から目をそらし、足もとを見て歩く。

弥助はまだ何か話している。

頭の上に、晩春の日が輝いている。九郎助は顔を上げない。

晴れ渡った空を、幾百羽の小鳥の群れが、黄色い翼をひらめかせ、鳴きながら峰から峰へ渡って行く。

行手に榛名が蒼くそびえている。

その下を、うつむいた九郎助と、話し続ける弥助が

下って行く。

終

原作・出典

菊池寛『入れ札』小説版

青空文庫　作品ＩＤ：４７８５８

底　本『藤十郎の恋・恩讐の彼方に』

新潮文庫、新潮社。１９７０年初版。

１９９０年１月１５日第３４刷を使用。

入力：川山隆／校正：ｎｏｒｉｋｏ　ｓａｉｔｏ

菊池寛『入れ札』戯曲版

青空文庫　作品ＩＤ：４８６

底　本『菊池寛　短篇と戯曲』

文芸春秋。１９８８年３月２５日第１刷。

入力：真先芳秋／校正：大野晋

本稿は小説版の筋と結末に従い、戯曲版から場面と台詞の一部を

採った映像用脚色である。

脚色：Ｃｌａｕｄｅ（生成ＡＩ）

制作日：２０２６年１１月１７日